

## 或る日の教話

月が変りました。心も新たに信心のけいこに励むおかげを頂いて参りたいものです。信心はまずどういふところから入っていくのか、ということから考えてみましょう。それは、自分がこうなりたい、ああなりたいという願いから入るものだと思うかもしれませんがそうではありません。

いま、自分がここにこうしているということを見てもまず知るところから入らせてもらわないといけないのです。何年か、何十年か前にはこの世に存在していなかった私であります。これから先も永遠に存在するものではありません。たまたま今ここにいます。期限つきの存在と言えます。そうしてここにいます自分は他の人と全く違うのです。顔形の違うように考えていることもすべて違うのです。自分と同じ人間は世界中にいない、そういう自分がいるのであります。自分は自分であるという思いをいつも持っていることが大切であります。

仕事があつて、仕事、仕事といつも仕事にばかりかまけていたり、孫がうまれて孫、孫といつていると自分を見失ってしまうことがあります。

自分がここにいるということは天地があつて、その恵みをうけているということなのです。

太陽のお照らしを受け、土からの作物を頂いて生かされて生きているのです。自己の存在を  
知れば、自己が生かされている天地のあることを知り、天地のあることを知れば、天地に神  
のあることを知らなければなりません。

また自分がここにいるという一つのことは、親・先祖があって自分があるということ  
です。先祖代々の血のつながりを受けて自分があるということは否定できない事実なのです。  
そしてその自分は現在の仲間と縁あって一緒にいるのです。更に人間が文化的な生活をして  
いく為に家、車などの物質や金銭の世界があります。この現実の世界はすぐ眼にふれるから、  
ついこのことに心が傾いて力が入ってしまいます。

生きていくということとはすべて、順を追って見ていかなければならないのです。そしてそ  
のすべてに対して感謝が生まれてこなければなりません。

まず自分がここに存在しているということに対する感謝です。自分の存在を感謝している  
のとそうでないのではおおいに方向が違ってきます。有難や、親あつての私天地あつての  
私と思うのと、自分のことをうとましく思っているのではその向きが違ってくるのです。

これは基本的な心の問題といえます。一つしかない限りある心、その心を基本的な大事な  
ことに使わせてもらわなければなりませんその基本は、喜び・感謝なのです。これが心の基  
礎とならせてもらいたいものです。自分で自分をいやがっているところからの出発では何を

してもよい方には行かないのです。いやいや働いても儲かるわけがありません。

すべてに感謝する心が土台になっていると心配や憎しみ、腹立ちなどは寄りつかなくなるものなのです。反対に親を憎んでいたたり、自分をいやがっていたりすると、そこにはもろもろの悪い心がくつついてくるのです。

また集中的に心を使うということがあります。例えば孫のことを思い過ぎて集中豪雨のように思いをかけるというのは欠点になります。何でもたくさん思えばよいというものではないのです。

自分あること、天地あることをしっかり思っていると、心はそんなにほかのことで使い過ぎるといふあやまちを犯さなくてすみます自分の心の在り方をしっかり見つめて、心の行としたいものです。